



千葉労働運動

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)
電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番
(公) 043 (222) 7207 番

97.7.24 No. 4628

千葉支社は、事前通知「凍結」の責任をとれ!

直ちにスト体制を!

本部は、千葉支社が、七月一日付発令予定で行なった異動の事前通知を、JR東労組・革マルの介入によって「凍結」するという前代未聞の事態に強く抗議し、労働省・中労委にストライキの事前通知を行なった。

責任をとれ!

一旦だした事前通知を四日後に「凍結」するなど、まさに国鉄時代も含め、前代未聞のことだ。事柄から言えば、人事課長は辞表をだして責任を取らなければならぬ性格のものである。

しかも、このようなことが、JR東労組・革マルの人事への介入・横やりによって強行されたのだから、まさに異常さも極まったという他ない。

千葉支社は、この事態をぬり隠すためにウソにウソを重ねている。団交では、「十月ダイヤ改の要員面で不確定な要素が発生した」などという白々しいウソを並べたが、それ自体がまさに不誠実団交＝違法行為だ。実際現場では、あまりに異様な革マル結託体制にウンザリした管理者は、「東労組の關係で異動がストップした」と公言し、東労組自身が「事前通知を止めた」と語っており、誰ひとりとして事の本質を知らない者はいないのだ。現場では異動対象者の名前まであがって「〇〇は千葉転に行ったら国労に戻ってしまう

から止めた」「背景には銚子運転区の異動問題もからんでいる」等々が公然と語られている。

JRの革マル結託体制は、まさに組織としての自浄作用を完全に失うところまで行き着いてしまった。動労千葉や国労に対しては、十年以上にわたり、組織破壊だけを理由として、どれだけのメチャクチャな強制配転が行なわれたのか。われわれは、煮えたぎる怒りも新たに今回の事態を弾劾し、千葉支社の責任を徹底追及する決意だ。

結託体制の危機

一方で、今回の「凍結」問題は、JR-JR東労・革マル結託体制の矛盾がおし隠しようもなく拡大していること、そしてJR東労・革マルが、組織崩壊の危機に怯え、戦々競々としていることを示している。

そもそも結託体制がうまくいってれば、事前通知がだされた後でその人選をひっくり返しかかるなどということが起こるはずはない。だから今回の事態は、当局と東労組の間や東労組の内部で矛盾と亀裂が拡大していることを示している。

また、東労組のよって立つ基盤は当局との癒着体制である。当局の力を背景にしてなりたっているに過ぎない東労組にして見れば、一旦だされた事前通知

にまで手をつけるなどということとは、組織崩壊の危機感なしにはあり得ないことだ。分割・民営化の完全な破たんという状況のなかで彼らは、雑巾のように使い捨てられることに怯えているのだ。しかも、このように東労組内の革マル系の意向だけで人事をもてあそばさようなやり方は、東労組内にも大きな対立を生まざるを得ないだろう。

JR総連・革マルの危機感からくる凶暴化を軽視することなく、一切の組織破壊攻撃をはね返す闘争体制を創りあげよう。

千葉転・館山に要員操縦を!

「凍結」は、職場に大きな混乱を及ぼしている。今回の異動のうち、館山運転区への操縦は、五五歳、五七歳到達者の欠員補充であり、切実な必要要員だ。

千葉転では、夏季輸送の大半を担うという状況のなかで、それだけでなく遅れていた要員操縦がストップしてしまった。しかも千葉転では、この期間に、貨物会社との受委託解消に伴うD業務の訓練が入っているのだ。現場では、土・日を中心とする臨時業務を回すために、年休抑制や交番変更が行なわれている。その片や習志野運転区や京葉運転区では、多数の過員を抱え、「凍結」された者は予備勤務に指定されているのだ。

千葉支社は、本人の希望に基づき、直ちに千葉運転区・館山運転区への要員操縦を行なえ!

直ちに闘争体制をつくらう

今回の事態は、職場をめぐる一切の問題・諸悪の根源がJRと東労組の結託体制にあることを改めて浮き彫りにした。

動労千葉は、七月一七日、事前通知「凍結」に関する責任追及をはじめ、この間の不当な労務政策の即刻中止について改め申し入れを行なった。われわれは、次のとおり要求する。

- (1) 事前通知「凍結」について、責任所在を明らかにせよ! 虚偽の回答を撤回せよ!
- (2) 千葉転・館山に直ちに要員操縦を行なえ!
- (3) 強制配転者を直ちに原職に戻せ!
- (4) 予科生を直ちに士職に登用せよ!
- (5) 指導操縦者の指定について、組合差別を中止せよ!
- (6) 昇進試験の組合差別をやめろ!

夏から年末にかけて、国鉄闘争は最大の正念場を迎えている。動労千葉は、「凍結」問題をきっかけとしてあらわになった結託体制の危機と矛盾を突いて直ちに闘争体制に突入する。一切の組織破壊攻撃を許すな! 不当な業務運営や組織破壊攻撃が発覚した場合は、いつでもストライキに決起できる組織体制をつくりあげよう。恒常的なストライキ体制を強化しよう。